史料室だより No. 85 東洋英和女学院史料室委員会
発　行　2015年11月4日

特集 ：「花子とアン」始まりと経過、そしてこれから

なぜアンだったのか、花子だったのか

村岡　恵理

前触れ

2013年早春、私は村岡花子の生誕120年の記念に河出書房新社から出版する『村岡花子と赤毛のアンの世界』の執筆と編集作業に追われていた。私の本の他にも奥田実紀氏の『図説　赤毛のアン』、そして川端有子氏編著による『赤毛のアンのスクラップブック』の同時刊行が決まっていた。出版界の現状は厳しい。１冊では目立たないが、３冊揃い踏みだと人の目にとまる。「なぜ今アンなのか？」という問いかけとなり、メディアにも取り上げてもらいやすくなる、というねらいらしい。現に担当編集者の村松恭子さんと松尾亜紀子さんは同僚たちに「何で今アンなの？」と首をかしげられていたそうである。翌年の2014年はモンゴメリの生誕140年でもあり、百貨店巡回展の噂も聞こえていた。その実現を切願しつつの明るい皮算用もなきにしもだったが、ことの発端は村松さんと松尾さんの間に起こった人生何度目かの「アン・ブーム」である。

村松さんは東日本大震災以来、気持ちが落ち込んで本が読めなくなったという。ふと『赤毛のアン』を手にとり、シリーズを再読していくうちに再び原点に立ち返り、「曲り角の先にあるものを信じて」歩いていく力を与えられた。さらに拙書『アンのゆりかご』を読んで翻訳者村岡花子の生涯に触れ、花子が残した言葉やその多角的な活動を、解説や論考を交えて紹介する書籍の企画を通した。村岡花子のエッセイ集の企画案も上がったが、こちらは私が100篇ほどを選んだ段階で保留。一方の松尾さんもアン・シリーズの長年の愛読者で、作品による自己回帰の感覚を共有していた。モンゴメリの美的センスと創作のディテールの詰まったスクラップ・ブックの解説本は彼女が７年もの間あたためていたファン待望の書である。ふたりの熱意にいつしか私も巻き込まれていた。

2013年～2014年にかけて刊行された『赤毛のアン』もしくは「村岡花子」関連書（一部）

２月に入り、ようやく校正の段階まで辿り着いた頃、新潮文庫の編集者川上祥子さんが電話で『アンのゆりかご』がNHK連続テレビ小説の候補になっていると伝えてきた。ドラマ化の話は実は初めてではなかった。2008年にマガジンハウスから単行本を刊行した時、熱心な女性脚本家からドラマ化したいという相談があった。つい半年前にもNHKのBSプレミアムドキュメンタリードラマの女性プロデューサーから打診があったが、しばらくして「社内のコンペで負けました」という報告を受けたばかりだった。ドラマ化にはたくさんのハードルがあるのだろう。いずれにしても知らないところで決まる。ただ、私の描いた花子像が読み手の内部で躍動を始め、何かしら二次創作の意欲を掻き立てているのだとしたらそれは単純に嬉しくもあり、今の励みになった。

不思議なことにその頃からあちらこちらで風が立ち始めた。学研から子ども版の村岡花子の伝記を書いてほしいと頼まれる。2014年の百貨店巡回展が決定する。東京文京区にある弥生美術館から「村岡花子展」を開催したいという申

し出がある。弥生美術館の学芸員で、明治から昭和にかけての少女雑誌の研究家でもある内田静枝さんには『村岡花子と赤毛のアンの世界』でも寄稿をお願いしていた。花子は中原淳一が手がけていた雑誌「少女の友」や「ひまわり」のブレインとしてブックレビューやエッセイを掲載していたので、それらの資料を調べているうちに内田さんにも私たちのブームが伝播したのだ。

ドラマ化内定、ブームの仕掛け

正式にドラマ化内定の知らせを受けたのは３月１日、「赤毛のアン記念館・村岡花子文庫」の活動として東日本大震災で保護者を失った子どもたちに特化した募金を募り、その一部を姉と連れ立って宮城県の施設に届けに行った帰りの車中であった。私は携帯電話を切った後、アンを読んで再び元気を取り戻したと語っていた村松さんのことを思い出した。なぜ今アンなのか、そして花子なのか。本を通して希望を贈り続けた花子の姿、アンの言葉は被災した人々の心をも本当に癒すことができるのだろうか。

ドラマ化が内定した後も記者発表までは口外しないよう言い渡されていた。情報が洩れて取り消しになった例もあるというから大変である。当初、４月末に予定されていた記者発表は連休明けになり、５月の末になり、延びに延びて結局は６月25日に実施された。話したいのを我慢していた私の口もカモノハシのように伸びていたような気がする。

2014年前期NHK連続テレビ小説（３月31日～９月27日）のタイトルは「花子とアン」。総括プロデューサー加賀田透氏、脚本は中園ミホ氏が手がける。主演の村岡花子役は吉高由里子さん。先んじて決まっていた巡回展の企画会社（ビーンズ）と弥生美術館が大きな追い風を得たのは言うまでもない。花子の生地である山梨県甲府市でもドラマの宣伝を兼ねたのぼり旗が立ち、PR活動が始まった。山梨県立文学館にはゆかりの作家のひとりとして村岡花子の常設コーナーがある。山梨県立文学館も花子の文学的な足跡を辿った独自の企画展を開催することになった。主な企画展のうち、最後に決まったのは銀座の教文館である。実際花子が編集者として勤めていたキリスト教の流れを汲む出版社兼書店。関東大震災で倒壊したが、その後再建され、戦災を免れた歴史ある社屋が現存する。それぞれに準備を進める他方では、各出版社も

NHK連続テレビ小説「花子とアン」ポスター
NHK提供

関連書籍の刊行に動き出した。

村岡花子訳のアン・シリーズの版元である新潮社はビジュアル・ブック『花子とアンへの道 本が好き、仕事が好き、ひとが好き』を出版。河出書房新社では保留になっていた花子の随筆集の企画が通り、当初選んだ100篇を『腹心の友たちへ』と『曲り角のその先に』に振り分けた。その後､記念館の棚の奥から見つかった｢未発表」の直筆原稿と随筆を、随筆集としては３冊目の『想像の翼に乗って』に納める。さらに戦前の童話を集めた『たんぽぽの目』、内田静枝氏編集によるビジュアル解説本『村岡花子の世界　赤毛のアンとともに生きて』を刊行した。NHK出版からは絵本『アンを抱きしめて』（絵･わたせせいぞう／文･村岡恵理）。講談社からは、かつて最もよく読まれていたアン･シリーズ（挿絵・鈴木義治）の白と紫の装丁をリバイバルした『赤毛のアンの名言集』と、子ども向けの青い鳥文庫『赤毛のアン』の愛蔵版（クラシックな茶色の装丁に三方金）の美しい２冊。かつての愛読者と現在の幼い愛読者へ、ずっと手もとに置いておける本をという、編集者の願いと作品への愛情の「かたち」であった。他にも花子の翻訳作品の復刊や既刊、さらにムック本やプリンス・エドワード島の写真集なども多数増刷されて書店には特設コーナーが設けられた。

放送開始、ブームの到来

放送開始とともに企画展も順次開幕した。高視聴率が功を奏して４つの展覧会場はどこも盛況だった。ドラマ「花子とアン」は視聴者をつなぎ止める仕掛けや魅力に富んでいたのだろう。一方でその仕掛けや魅力のために、多くのフィクションが加えられていた。関連本や展覧会は、

日本橋三越における「モンゴメリと花子の赤毛のアン展」テープカット　2014年５月21日　左から３人目より、村岡恵理氏、ケイト・M. バトラー氏、村岡美枝氏

視聴者の旺盛な知識欲に応え、実像を伝える大きな役割を担ったと思う。特に、学生時代の花子がカナダ人宣教師から英語を叩き込まれる傍ら、白蓮の導きで短歌の佐佐木信綱門下に入門し、日本語の表現力を研鑽したこと、そこで出会った片山廣子に生涯にわたり大きな影響を受けたことはドラマでは割愛されていた。また、花子を生かし、支え続けたのは当時のキリスト教プロテスタント派のネットワークだったが、花子とキリスト教との深い関わり、信仰についても描かれなかった。この重要な２点、佐佐木信綱門下周辺については山梨県立文学館が、またキリスト教との関係については教文館が、それぞれ重点を置いて発信した。

他にも花子の母校、東洋英和女学院、教師時代を送った山梨英和学院、結婚してから亡くなるまでを過ごした東京大田区でもパネル展や催しが開かれた。白蓮の再婚相手、炭鉱王伊藤伝右衛門をモデルにした伊藤伝助が吉田鋼太郎氏の好演で大変な人気となり、福岡県、飯塚市の伊藤伝右衛門邸も連日、観光バスが何台も押し掛ける大盛況ぶりを見せた。

アンの言葉の力

私は20年以上にわたり「赤毛のアン記念館・村岡花子文庫」の活動を続けてきたのだが、悔しいけれど一翻訳家の生涯やその資料にこれほどの注目が集まったことはない。フィクションが実像を伝える機会を与え、また実像がフィクションの楽しみを倍増させるという相乗効果となっていった。お祭りは終わったが、文学者としての村岡花子についての本格的な研究はむしろこれが始まりであると思いたい。

なぜアンだったのか、そして花子だったのか。おそらく私たちには非常にシンプルな言葉が必要だったのだ。

花子は本とペンによって近代を生き抜く力を与えられた。本とペンは夢と知性の象徴であり、翼に変わる、ということを村岡花子は体現している。花子が伝えたかった本の力、そして「曲り角の先にもきっと素晴らしいものがある」というアンの言葉が、ひとりでも多くの人の心に残り、未来への灯となることを願っている。

（＊この文章は、山梨県立文学館発行「資料と研究」第20輯（2015年３月31日刊）所収の「なぜアンだったのか、花子だったのか」を一部修正したものです。）

村岡花子文庫寄贈に寄せて

村岡花子の翻訳家、児童文学者、社会活動家などの幅広い生き方を決定づけたのは10年の日々を過ごした東洋英和の教育であったことは、みなさんご存知の通りです。花子が東洋英和で得たものは、学問だけではなく、カナダ婦人宣教師たちから受けた感化でした。このスピリットは生涯にわたり、花子の中に生きていました。

私たちはそのことを第一に考え、このたび、大森の自宅に長く保管し、さらに1991年からは「赤毛のアン記念館・村岡花子文庫」として一般にも公開してきた花子の著作、蔵書、書簡類、児童書さらには書斎の家具なども東洋英和女学院に寄贈いたしました。

『赤毛のアン』初版のあとがきには「…この訳業を麻布の丘の母校にこもる若き日のおもいでと、今そこに学びつつあるわが心の妹たちにささげます」と書かれています。

学院に託すことにより、これらの資料がより多くの人の目に触れ、花子の息遣いや志が長く、後世の人びと、とりわけ母校に学ぶ若い妹たちに親しまれていくことを願うものです。おそらく祖母も母校に帰れることを喜んでくれていることと信じています。

（作家　高等部卒）